

# サマ主格変遷構文の意味と類推拡張

—「のが」型の主要部内在型関係節文と接続助詞的な「のが」文

天野みどり

## — 要旨

現代日本語には状態変化自動詞を述語とした《サマ主格変遷構文》が存在することを指摘し、この構文がベースとなり、一見異なる2つの構文のように見えるいわゆる「のが」型の主要部内在型関係節文と接続助詞的な「のが」節文とが、いずれも「のが」型の《サマ主格変遷構文》として生み出されていることを示す。特に逸脱的特徴を持つ「のが」節文の場合、《サマ主格変遷構文》の意味を類推拡張して成り立つことを示す。

## 0. はじめに

本稿の目的は、いわゆる「のが」型の主要部内在型関係節文も接続助詞的な「のが」節文も、同じ《サマ主格変遷構文》をベースとする文であることを示すことである。

本稿で扱う《サマ主格変遷構文》とは状態変化自動詞を述語とした、[Xが(Yに／と) V]形式の文であり、意味的には〈あるモノ・ヒトの一樣態・一状況Xが、異なる様態・状況Yに変化する〉ことを表す、以下のような文である。

- (1) 昨日までの富士山頂の青さが一夜にして真っ白になった。
- (2) 手のひび割れが治った。
- (3) 夜になってますます環状線の渋滞が悪化した。

また、「接続助詞的な「のが」節文」とは「のが」が主格というよりも接続助詞「のに」に近い意味を持ち、また、「のが」が主格だとするとその後続にその「のが」と関係する動詞述語句が見いだせないといった場合のある、以下のような文のことである。

- (4) 同社の内部資料によると、昨年十月は一日以上の延滞額が融資額全体の二二%だったのが、今年二月には二九%、三月には三一%、四月には三四%と急激に悪化している。  
(レー (1988 : 72) (1) 朝日新聞 1984-6)
- (5) ふだんは静かで、遠慮がちにさえみえるのが、ひとつの話題に夢中になると、口角泡をとばしてしゃべりまくるのも、マッテオの特徴で、そんな彼を、友人のな

かにはあまりよくいわない人がいるのが、だんだん私にもわかるようになった。

(須賀敦子「地図のない道」p.25)

- (6) ジェラード・マンレー・ホプキンズは十九世紀のイギリスの詩人だが、ながいあいだ、マイナーの宗教詩人としか考えられていなかったのが、近年、再評価の声が高い。  
(須賀敦子「トリエステの坂道」p.238)

次に、本稿で扱う「主要部内在型関係節文」とは以下の例が示すように主節述語句との格関係を埋める要素として「のが」節・「のを」節内部の要素(「酔っぱらい」「リング」)が該当するように見える文のことである。

(7) 駅で酔っ払いが騒いでいたのが警官に捕まった。 → 「のが」型

(8) リングがテーブルの上に置いてあったのを盗んできた。 → 「のを」型

これらのうち本稿では(7)のような「のが」型の主要部内在型関係節のみを取り扱う。また、尾谷(2001)に従い、本来ならば名詞句しか項にとれないはずの動詞が「の」で補文化された節を項として成立している文を扱い、本来的に補文をとる動詞(知覚動詞など)を用いた文や「もの」と置換可能な「の」を用いた文は含まないこととする。

## 1. 《サマ主格変遷構文》と《状態変化者主格変化構文》

まず、《サマ主格変遷構文》とはどのような構文かを考察しておこう。

(9) 昨日までの富士山頂の青さが一夜にして真っ白になった。

(10) 手のひび割れが治った。

(11) 夜になってますます環状線の渋滞が悪化した。

上の例が示すように、状態変化自動詞を述語とする文は状態変化者(=ヒト・モノ)ではなくヒト・モノの〈変化前の様態・状況〉(=サマ)を主格で示し、その様態・状況が異なる様態・状況に変化することを表す場合があるのである。これらの「青さ・ひび割れ・渋滞」というサマ名詞の意味を抽象化し「状態」と置き換えた文も以下のように成り立つことから、状態変化自動詞述語文ではサマ主格が可能であることが確認できる。

(12) 昨日までの富士山頂の(青い)状態が一夜にして真っ白になった。

(13) 手の(ひび割れているという)状態が治った。

(14) 夜になってますます環状線の(渋滞しているという)状態が悪化した。

天野(2012ab)(2013)(2014)はこの《サマ主格変遷構文》の意味を〈あるモノ・ヒトの一

【表1】《サマ主格変遷構文》の構文的特徴

- 
- ① 述語動詞は状態変化自動詞である。(なる・悪化する・膨らむ・高まる・変わる…)
  - ② 変化後の状態を表す[～に/と]が共起することが多い。(真っ白に)
  - ③ 主格は変化前の状態を表す名詞句である。
  - ④ 2時点の推移を表す時間的要素が共起したり、推移する条件や契機を表す要素が共起することが多い。  
(昨日までの/一夜にして・夜になって・ますます)
-

様態・一状況Xが、異なる様態・状況Yに変化する」と記述し、また、その構文の特徴として上の4点を挙げている【表1】。

サマ主格は、モノ・ヒトのある時に限定された一様態・一状況を示す主格である。つまりこの場合のサマは必ず状態変化者であるモノ・ヒトに所属する関係にあるということである。従って、《サマ主格変遷構文》が成り立つ時にはその所属先である状態変化者モノ・ヒトを主格とした次のような文が成り立つ。

(15) 富士山頂が一夜にして真っ白になった。

(16) 手が治った。

(17) 夜になってますます環状線が悪化した。

(15)～(17)は状態変化者の変化を表すのみであり、どのような始発状態からどのような結果状態へ変化したかという2状態の変遷を明示的に表しているわけではない。その始発状態は、変化後の記述から「そうでない状態」として推測して解釈されるに過ぎないのである。これらを《状態変化者主格変化構文》と呼んでおく。

## 2. 接続助詞的な「のが」節文

### 2.1 接続助詞的な「のが」節文の意味

他方、次のような文はいわゆる接続助詞的な「のが」の文である。

(18) 同社の内部資料によると、昨年十月は一日以上の延滞額が融資額全体の二二%だったのが、今年二月には二九%、三月には三一%、四月には三四%と急激に悪化している。  
(レー (1988: 72) (1) 朝日新聞1984-6)

(19) ふだんは静かで、遠慮がちにさえみえるのが、ひとつの話題に夢中になると、口角泡をとばしてしゃべりまくるのも、マッテオの特徴で、そんな彼を、友人のなかにはあまりよくいわない人がいるのが、だんだん私にもわかるようになった。  
(須賀敦子「地図のない道」p.25)

(20) ジェラード・マンレー・ホプキンズは十九世紀のイギリスの詩人だが、ながいあいだ、マイナーの宗教詩人としか考えられていなかったのが、近年、再評価の聲が高い。  
(須賀敦子「トリエステの坂道」p.238)

接続助詞的な「のが」については、①格助詞と異なり、接続助詞であるとする説(黒田(1999))、②接続助詞的だとし、格助詞との異なりを強調する説(寺村(1978)・レー(1988))、③当該文を《サマ主格変遷構文》に属するものとし、「のが」はサマ主格であるとする、つまりむしろ格助詞との共通性を強調する説(天野(2012ab)(2013)(2014))がある。本稿もこの第3の立場に立つ。

まず、接続助詞的な「のが」節文の意味を確認しておこう。例えば(18)の意味は〈延滞額が22%だった状態が、29%・31%・34%……という状態に悪化した〉、(19)は〈マッテオのおとなしい状態が、うるさい状態に変化した〉、(20)は〈ホプキンズのマイナー詩人の状

態が、メジャー詩人の状態に変化した」という意味に解釈することができるであろう。これは《サマ主格変遷構文》の構文的意味を具現しているものであると言える。

## 2.2 接続助詞的な「のが」節文の構文的特徴

また、接続助詞的な「のが」節文の構文的特徴を見てみよう。レー (1988) が接続助詞的な「のが」節文の例として挙げている全 50 例を調査した結果、【表 2】のようになった。

【表 2】接続助詞的な「のが」節文の構文的特徴 (天野 2012 調査)

- 
- ①主節述語が「なる」などの状態変化自動詞（その名詞化述語を含む）であることが多い…76%
  - ②変化後の状態を表す句が共起することが多い…62%
  - ③「のが」節述語句に「～た・ていた」形や「～はずだ・つもりだ」形が多く、ある時に確定された様態や、確定された予定の様態が表されることが多い…98%
  - ④2時点の推移を表す時間的要素が共起したり、推移する条件や契機を表す要素が共起することが多い…98%
- 

さらに、「国立国語研究所書き言葉均衡コーパス」を用いて新たに接続助詞的な「のが」の例文を 50 例収集し、その特徴を調査した結果も以下の【表 3】に示す（天野 2013 調査 a）。

【表 3】接続助詞的な「のが」節文の構文的特徴 (天野 2013 調査 a)

- 
- ①主節述語句が状態変化自動詞…70%
  - ②変化後の状態を表す句が共起…52%
  - ③「のが」節述語句「～た」形…100%
  - ④推移副詞句の共起…86%
- 

この調査の結果も【表 2】と同様の傾向を示しており、接続助詞的な「のが」節文は《サマ主格変遷構文》の構文的特徴①～④を持つものと言える。

## 2.3 接続助詞的な「のが」節文の許容度

さらに、天野 (2012ab) (2013) (2014) では接続助詞的な「のが」節文の許容度調査を行い、その度合いの差が主節述語句の違いによるとしている【表 4】。

【表 4】接続助詞的な「のが」節文の 3 分類と許容度の変化 (天野 2012 調査結果より)

	主節述語句	許容度	例
A 類	状態変化自動詞	高	(18) 「悪化する」
B 類	非状態変化自動詞	↓	(19) 「しゃべりまくる」
C 類	[X が V]	低	(20) 「声が高い」

---

すなわち、主節述語が状態変化自動詞の場合には接続助詞的な「のが」節文の許容度は高い (A 類)。しかし、主節述語が行為動詞や感情動詞など、非状態変化動詞の場合には許容度が低くなり (B 類)、さらに主節動詞と結びつく主格が「のが」節以外に存在する場合 (C

類)には許容度がかなり低くなるということである。この許容度の低下は、非状態変化自動詞や[XがV]全体を、状態変化自動詞の意味に変容解釈しなければならないために生じるものと考えられる。つまり、A類の場合もB類・C類の場合も、接続助詞的な「のが」節文は《サマ主格変遷構文》に属するものと捉えられているのであり、《サマ主格変遷構文》として解釈しやすいものほど許容度が高く、しにくいものほど許容度が低いということなのである。

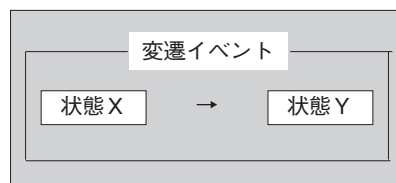
B類・C類は「のが」の結びつき先が主節に見いだせず逸脱的な「のが」節文である。このような類があるために、この「のが」は主格ではなく接続助詞であるとされることもあるわけだが、こうした類も状態変化の意味に変容解釈されて成立している。接続助詞的な「のが」節文は許容度の高いものから低いものまで全て《サマ主格変遷構文》に属するものであり、《サマ主格変遷構文》をベースに主節述語句の意味を変容解釈して成り立つものなのである。

### 3. 《サマ主格変遷構文》における〈サマ〉と〈状態変化者〉再考 — 〈変遷イベント〉

2節までの考察をふまえ、《サマ主格変遷構文》の表す〈変遷〉の意味を再考してみよう。〈変遷〉とは、ある〈状態〉から異なる〈状態〉への推移であり、2つ(複数)の〈状態〉を必ず内に含み、それらの〈状態〉を1つの時間的流れの中にあるものとしてまとめ、1つのイベントとして捉えたものである。

この場合の全体としてまとめられた1つのイベントを〈変遷イベント〉と呼ぶことにする。

〈変遷イベント〉には必ず〈変遷イベント〉の所有者が存在する。〈変遷イベント〉の所有者とは、その推移する複数の〈状態〉を共に持つ持ち主である。これは、〈状態変化者〉として一般に状態変化自動詞文の主格となり得るものである。



《サマ主格変遷構文》における〈変遷イベント〉の所有者、すなわち〈状態変化者〉と、サマ主格を構成する〈サマ〉とは、持ち主と部分の関係、言い換えればいわゆる全体部分の意味的關係にあり、サマ主格を構成する〈サマ〉は意味的に必ずその持ち主である〈状態変化者〉を前提にしていると言える。この前提とされる〈変遷イベント〉の所有者は言語化されることも多い。

(21) たたとえば、いまから一五年前には、ビールの容器はビンと缶を合わせて八種類だったのが、現在では一六〇種類のデザインが生み出されている。

(堺屋太一「知的革命に何が邪魔で、何が不可欠か」)

この場合、〈変遷イベント〉の所有者として「ビールの容器」が「は」を伴って顕在し〈変遷イベント〉の意味として「ビールの容器」の種類が8種類以下だった状態が、160種類の状態に変化)したことを表している。

では、接続助詞的な「のが」節文において〈変遷イベント〉の所有者はどの程度言語化されているのだろうか。「現代日本語書き言葉均衡コーパス」で収集した50例について調査した結果が以下の【表5】である。

【表5】「のが」節事態と主節事態に共通する〈変遷イベント〉所有者の言語化  
(天野 2013 調査 b 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」50 例対象)

I 言語的に顕示されているもの	…39 例	78%	
① 同じ文内に「は」で顕示	12 例		} 同じ文内で顕示①～④ 25 例 50%
② 同じ文内に「も」で顕示	3 例		
③ 同じ文内に「が」で顕示	5 例		
④ 同じ文内に他の格等で顕示	5 例		
⑤ 先行文脈に顕示	14 例		
II 言語的に非顕示だが推定されるもの	…10 例	20%	
⑥ 先行文脈・状況・後件（主節事態）を手がかりに推定（後件に言語化を含む）	10 例		
III 推定がかなり困難なもの	…1 例	2%	→最も接続助詞的

(21) のように同じ文内で顕示されているのは全体の50%をも占める。また文内ではないが先行文脈に顕示されている場合(⑤)とは例えば以下のような例であり、このようなものも含め言語的に顕示されている場合は78%にのぼる。

(22) 時計の針が逆に回ってるんだよ(笑)。『夜明け前』のとき午前五時頃だったのがいま夜中の三時頃になってるんだよ。一方で、吉田健一全集が出ちゃうわけだからね。

(新保祐司・富岡幸一郎「対談『夜明け前』と『天皇の世紀』」)

〈変遷イベント〉の所有者＝〈状態変化者〉＝「時計の針」

〈時計の針が『夜明け前』のとき午前五時頃だった状態が、今は夜中の三時頃の状態に変化〉

また、II⑥先行文脈・状況・後件を手がかりに推定される場合とは以下のようなものである。

(23) 日本では大学に入ると勉強しなくなる。それが日本の教育制度の大きな問題点だった。以前は東大を出ていれば官庁でも一流企業でも、苦もなく就職できたのが、長引く不況でそうもいなくなってきた。

(和田秀樹「ユダヤに学ぶ世界最強の勉強法 わが子を億万長者に育てる方法」)

〈変遷イベント〉の所有者＝〈状態変化者〉＝（東大卒者）と推定

〈東大卒者が苦もなく就職できた状態が、苦もなく就職するわけにはいかない状態に変化〉

さらに、III〈変遷イベント〉の所有者の推定がかなり困難なものとは以下のようなものである。

(24) 被害者のグリムショウ少年は、フォード社を相手に製造物責任訴訟を提起したのが、この裁判の過程でフォード社が「社内テストで衝突時のガソリン漏れが確認されたが、市場で出回っているピントを回収して安全対策を施すより、そのまま放置して火災事故の被害者に賠償金を支払う方が経済的」との検討を行っていたことが暴露されたため、1978年の評決でフォード社は通常の損害賠償金の350

万ドル (当時約8億円) に加え1億2500万ドル (同約300億円) にも及ぶ懲罰的賠償金を課された。 (滝川宜信「実践企業法務入門」)

〈変遷イベント〉の所有者=〈状態変化者〉= (製造物責任訴訟) ?

〈製造物責任訴訟は少年が提起した状態が、フォード社が敗訴し莫大な賠償金を支払う状態に変化) ?

こうした場合も2つの状態を共通にもつ状態変化者・〈変遷イベント〉の所有者を文脈によって推定することは何とかできる。接続助詞的な「のが」節文は「のが」節事態と主節事態の両方の状態を共有する状態変化者を必ず見いだせるのである。

#### 4. 「のが」型の主要部内在型関係節文

次に、考察の対象を接続助詞的な「のが」から「のが」型の主要部内在型関係節に移そう。本研究の中心的な主張を先取りして述べれば、「のが」型の主要部内在型関係節文も接続助詞的な「のが」節文と同様に「のが」節全体がサマ主格である、《サマ主格変遷構文》に属するものだという事である。

「のが」型の主要部内在型関係節文と接続助詞的な「のが」節文の関係について言及する主要な先行研究を挙げると、①両者は全く異なる、関係節と副詞節である (黒田 (1999)) ②両者はすべて同じ副詞節である (一連の三原研究) ③両者は連続している (レー (1988)) ④両者は分けられず、二重性がある (一連の坪本研究) となろう。これに対し、本稿の捉え方は両者はすべて同じサマ主格の「のが」節であるというものである。(先行研究は「のが」型と「のを」型を区別せずに論じていることに注意。以下同じ。)

##### 4.1 「のが」型の主要部内在型関係節文の意味、構文的特徴

まず、「のが」型の主要部内在型関係節文の意味を考察しよう。

(25) 馬で酔っ払いが騒いでいたのが警官に捕まった。(黒田 (1999) (1))

(26) 坂道をボールが転がっていったのが、やがて川に落ちた。(尾谷 (2001) (2))

(25) は〈酔っ払いが騒いでいた状態が、警官に捕まった状態に変化した〉という意味であり、(26) は〈ボールが転がっていた状態が、川に落ちた状態に変化した〉という意味である。これらはある始発状態がそれと異なる状態に変化したことを表す《サマ主格変遷構文》の意味に合致していると言える。

本稿の立場からすれば従来「主要部」として解釈されてきた要素(「酔っ払い」「ボール」)は〈変遷イベント〉の所有者が主格の形式で「のが」節内に顕在したもの過ぎない。「主要部」のみが主節述語句と統語関係を結ぶのではなく、「のが」節全体がサマ主格として主節述語句と統語関係を結ぶと考えることになる。

では、構文的特徴はどうだろうか。先行研究に許容度が高い「のが」型主要部内在型関係節文の例として挙げられている34例を対象に調査した結果が次頁の【表6】である。

【表 6】「のが」型主要部内在型関係節文の構文的特徴（天野 2013 調査 b より）

①主節述語が状態変化自動詞（受動詞）	…24 例・71%
②変化後の状態を表す句が共起	… 5 例・15%
③「のが」節述語句「～た」形	…33 例・97%（1 例「る形」は予定の意）
④推移副詞句の共起	…15 例・44%

この結果は《サマ主格変遷構文》の構文的特徴からそう大きく外れているとは言えないであろう。②・④は 50%を下回っているが、任意の要素の共起性であることを考えれば、その顕現率が低くても「のが」型の主要部内在型関係節文が《サマ主格変遷構文》であることの反証とは言えない。

#### 4.2 「のが」型の主要部内在型関係節文の成立条件：尾谷（2001）の再検討

これまで主要部内在型関係節の成立条件については様々なことが言われてきた。尾谷（2001）はその諸説（関連性・同時性・Enablement・Cause・Precondition）を検討した上で以下の条件を述べている。

- (27) HIR 構文（主要部内在型関係節文）が成立するために最低限必要な条件は 2 つある。1 つは内在節事態が主節事態よりも時間的に先行していなければならないというもの（条件①）であり、もう 1 つは、それら 2 つの事態間に何らかの連続性が認められなければならないというもの（条件②）である。HIR 構文が成立するとき、この 2 つの条件は必ず満たされている。そして容認度の低い HIR 構文がちゃんと容認可能な HIR 構文として成立するためには、これら 2 つの制約に加えて、「内在節の変化」（条件③）を満たすようにすればよい。

尾谷（2001）のまとめた 3 つの成立条件、内在節の先行性・2 事態の連続性・内在節事態の変化性が妥当だとしても、ではなぜそのような条件が必要なのだろうか。内在節事態の変化性が十分条件であることの理由として尾谷（2001）は「際立ち」を高める 1 つの手段だからとしているが、なぜ「際立ち」を高める手段として変化性が選ばれるのだろうか。

本稿の立場からすれば、「のが」型の主要部内在型関係節文が《サマ主格変遷構文》に属する文であるために、その構文的意味として必然的に内在節の先行性・2 事態の連続性が生じるのだと言える。また、《サマ主格変遷構文》に属する文であるために、〈変遷〉の意味を解釈しやすいほど、つまり内在節事態の変化性が強く認められるほど、許容度は高くなるということなのだと思う。

#### 4.3 従来の「関係節説」ではうまく説明できない現象

##### 4.3.1 内在型と外在型の意味の違い

当該文を主要部が「のが」節内部にある「関係節」だと考える立場では説明できない現象がいくつか指摘されている。これらも本稿のように「のが」節全体がサマ主格となり主節述語句と関係するのだと考えればうまく説明できる。



まず、主要部内在型 (28) (30) と、その主要部が節の外にある外在型 (29) (31) とで意味が異なることを、主要部内在型関係節説では説明できない。

(28) 氷が皿の上で溶けてしまったのが、風を受けてぼたぼたとこぼれた。

(29) ? 皿の上で溶けてしまった氷が、風を受けてぼたぼたとこぼれた。

(30) 多くの医師や看護師がバタバタと騒がしかったのが、一時間後には私だけで静かになった。

(31) ? バタバタと騒がしかった多くの医師や看護師が、一時間後には私だけで静かになった。

(29) (31) の外在主要部は〈変遷イベント〉の所有者ではないため、(28) (30) とはかなり異なるものとなっている。そもそも、(28) (30) は「氷が皿の上で溶けてしまった」状態全体・「多くの医師や看護師がバタバタと騒がしかった」状態全体が主格となっていると考えれば、「氷」・「多くの医師や看護師」だけが主格となる外在型と意味が異なることはむしろ当然のことである。

#### 4.3.2 主要部が無い現象

主要部が明確に「のが」節内に言語化されない現象も内在関係節説への疑問として提示されている。

(32) 不思議なことに、今まで身体の関節が非常に痛かったのが、飛び起きると同時に忘れたように軽くなった。(坪本 (2003) (20a))

(33) 今朝顔を剃ったのが夕方にはまた伸びてきた。

(34) \*今朝剃った顔が夕方にはまた伸びてきた。(野村 (2001) (14a))

こうした例も《サマ主格変遷構文》に属するものとする立場ならうまく説明できる。この立場に拠れば「のが」節全体がサマの意味で主格となるのであり、「のが」節内の一要素が主節述語句と統語的關係を結ぶわけではないので、主要部が「のが」節内に見いだせなくても何ら問題とならないのである。(32) の意味は〈関節の痛みが非常に強かった状態が、軽減した状態に変化した〉ということであるし、(33) は〈髭を剃って、髭の伸びていない状態が、伸びた状態に変化した〉ということだと解釈される。

#### 4.3.3 分離軸現象

分離軸現象とは異なる複数の項が主要部と考えられる現象のことであり、これも当該文を主要部内在型関係節文と考える立場では説明の困難な現象である。

(35) 警官が泥棒を追い詰めたのが、勢い余って2人とも川に落ちた。

(三原・平岩 (2006) (6c))

しかし、2つの主要部が主節と統語的關係を結ぶわけではなく、「のが」節全体が示す1つの状態が主節と関係し異なる状態に変化したことを表すものと考えれば問題とならない。

(35) の意味は〈警官が泥棒を追い詰めた2人の状態が、2人とも川に落ちた状態に変化し

た)ということである。

#### 4.3.4 主節指示詞顕現現象 (坪本現象)

また、「のが」節の他に主節に「指示詞+が・を」が顕現し、「のが」節と主節述語句との統語関係が阻止されているように見える現象が指摘されている。

- (36) お金を財布に入れておいたのが、それがいつの間になくなった。

(坪本 (1994) (56) (1995) (10b))

- (37) 今まで葛練りの中で泳いでいるように身動きができなかったのが、それが急に楽になったと思ったら、敵も味方も一度に引き上げてしまった。

(坪本 (1994) (41))

- (38) 村井にメモを残しておこう思っていたのが、あれやこれやで、すっかりそれを忘れてしまった。(三原 (2006) (42a))

しかし、これも「それが+V」「それを+V」全体で異なる状態への変化を表すと考えれば問題にならない。(36)は〈お金をしまっておいた状態が、それ(お金)がなくなった状態に変化した〉意味、(37)は〈身動きができない状態が、それ(身動き)ができる状態に変化した〉意味、(38)は〈メモを残そうと思っていた状態が、それ(メモを残そうと思っていたこと)を忘れた状態に変化した〉意味に解釈できる。

#### 4.3.5 格の不一致

「のが」節が主格であるのに対し主節述語句の要求する格が主格ではなく、不一致が生じている場合がある。

- (39) 村井にメモを残しておこう思っていたのが、あれやこれやで、すっかり忘れてしまった。(三原 (2006) (31a)) →～を忘れる

- (40) ピカソの絵が壁にかけてあったのが、太郎がズタズタに引き裂いてしまった。(三原 (2006) (34)) →～を引き裂く

これらを証拠の1つとして三原は副詞節とするし、黒田もこれらを主要部内在型関係節とは切り離して副詞節とする。しかし、主節述語句を変容解釈した《サマ主格変遷構文》と考えれば問題にならない。(39)は記憶者が共通する〈変遷イベント〉を表しており、「やることを忘れた」という状態に変化した意味、(40)は「引き裂いた」という非状態変化動詞から状態変化の意味を変容解釈し、〈絵が飾られていた状態から元の飾られていた状態とは異なる状態に変化した〉という意味を表していると解釈される。

#### 4.4 従来の「副詞節説」ではうまく説明できない現象

三原は「のが」を副詞節とするが、その文成立に関連性条件などの成立条件が必要なのはなぜだろうか。同じ副詞節の「のに」「ので」は必要ないのである。

また、「のが」型主要部内在型関係節文と「のを」型主要部内在型関係節文の違いについ

てはどのように説明できるのだろうか。黒田 (1999) は、副詞節の「のが」「のを」に違いがあると認め、それぞれ格助詞「が」「を」を引き継ぐためと指摘しているが、副詞節説の三原はこの違いに言及していない。三原 (2006) は「内在節に付けられている「が／を／に」は提示機能を担う後置詞であり、「内在節+後置詞」の総体が、主節事態に対する背景的事態を表す副詞節として機能する。提示機能を担う後置詞とは、概ね「～について言えば」という aboutness 機能を有する後置詞を言う。」(p.167) と述べるのみである。

本稿ではむしろ「のが」「のを」「のに」「ので」の違いを重視する。「のに」「ので」は接続助詞として認定できるのに対し、「のが」は《サマ主格変遷構文》の主格、「のを」は《方向性制御他動構文》の対格であり、それぞれの構文的意味の違い・格機能の違いに応じて「のが」「のを」の意味も異なるのだと考える。

#### 4.5 「関係節」・「副詞節」の連続説について

レー (1988) は、主部内在型関係節といわれる接続助詞的な「のが」を合わせて「事態顕述の連体節」と呼び、前者・主部内在型関係節は主部が「の」節内に残り、「の」が「名詞性をほぼ保持している」のに対し、後者・接続助詞的「のが」は主部が「主題化」したり「無形化」したりして、「の」の「名詞性」が喪失しつつあるとしている。そして、この「の」の名詞性の稀薄化と接続助詞化とが相関するとしている。また、意味的にも両者には違いがあり、前者は「の節」と主節との間に「連結性」があるのに対し、後者は「対比性」があるとしている。この、レー (1988) の主部の「主題化」「無形化」とはどのようなものだろうか。

(41) 紺野は二、三日前倫の使いに区役所に行つて書類を倫に渡す筈だつたのが、倫が不在だつたので須賀に手渡した。(レー (1988) p.4 (11)) 「主題化」の例

(42) 今までの気象学は『あらしの気象学』だつたが、ほかに近年は『静穏の気象学』が必要になってきた、という話がある。今までは暴風雨を警戒していればよかつたのが、近年、静穏な日にも災害がおこる。(同上 p.84 (55)) 「無形化」の例

主題化は、(41) の「紺野は」のように、「の節」の主部と解釈できる要素が「は」を伴って現れ、主節述語「手渡す」と直接関係すると見なせる現象を指している。また、無形化は、主節述語と直接関係する要素が「の節」内に見いだせない現象を指していると思われる。レー (1988) の「無形化」の例は 15 例あるがそのうち 14 例が「のを」であり「のが」は (42) の 1 例のみである。しかもこの「のが」の無形化の例に対しては説明がないので、「のを」についての以下の例の説明を参考にしてみたい。

(43) 注目されるのは、英国ロンドンの国際戦略研究所 (IIS) が近年、「CIA ばなれ」とも見られる姿勢をとっていることだ。一九七〇年代半ばまではその年次報告「ミリタリー・バランス」で、CIA の推計を、ほぼそのままソ連の国防費として使つていたのを、近年は空欄に。(レー (1988) p.4 (14)) 「無形化」の例

「英国ロンドンの国際戦略研究所 (IIS) が、近年はソ連の国防費の欄を空欄にしていると解釈することができる」(p.84) とあり、「ソ連の国防費の欄」という主名詞が顕現せず、推

論により想定されるものであることを述べている。これがレーの無形化である。

しかし、「のが」節の無形化の例 (42) では、「のが」節内に主部が無いという問題だけではなく、主節動詞「おこる」と直接関係するガ格が「災害が」で顕現しており、「のが」がどのような資格で主節動詞と関係するのかがそもそも不明だという問題がある。

レー (1988) は、このような主部の「主題化」「無形化」により、「の」は主部を受け継いで主節述語に関係させるという役割が必要なくなり、名詞性が喪失しつつあるとし、「が」「を」のような格助詞が格関係を表さなくなると述べている (p.5, p.84)。つまり、主部を受け継ぐから「の」に名詞性があるのであり、内在主部が無ければ「の」の名詞性も無い、そこで「のが」は名詞+格助詞ではなく、全体で接続助詞であるというように傾いていくと考えているわけである。

しかし、この「主部」とは何であろうか。当該の「のが」節文は「のが」全体で主格を表すのであり、〈変遷イベント〉の所有者が「のが」節内部に顕在した場合に「主部」と認めているに過ぎないとすれば、それが主題化したり無形化したりするのも不思議なことではない。いずれも《サマ主格変遷構文》であり、その「の」節の名詞性は天野 (2013) (2014) が示したように「のに」「ので」のそれよりも保持されていると見られる。

#### 4.6 参照点構文説について

野村 (2001) は認知文法の立場から主要部内在型関係節文は参照点構文であるとする。主要部内在型関係節文は、「のが」節事態 (全体) を参与者とする関係を「プロフィール」し、その「のが」節事態に何らかの意味で関連するある要素 (部分) が主節事態との関わりにおいて「活性領域」として働き、主要部として解釈されるとする。「のが」節全体が主節述語句と関係するのであり、従って内在節文と外在節文とは独立した意味構造を持つ文として区別すべきであるとする点は、本稿と同じである。

しかし、なぜ当該の構文において「プロフィール」と「活性領域」が関与するのだろうか。例えば、「主要部」を欠く主要部内在型関係節文 (今朝顔を剃ったのが夕方にはまた伸びてきた) において、従属節全体がプロフィールされ、それと関連する要素である〈ひげ〉が主節動詞「伸びてきた」ともっとも直接的、決定的に関与する活性領域として解釈されると野村は考える。しかし、この活性領域はどのようにして絞られるのだろうか。何をもって直接的・決定的関与と考えられるのだろうか。例えば「のを」型の例ではあるが、「バケツを倒してしまったのを拭き取った」について、野村は「従属節事態に関連するある概念が認知的に際立ち、主体の注意の焦点を引きつけやすければやすいほど、その概念は「主要部」として解釈されやすくなる。」としているが、その「認知的際立ち」はなぜ起こるのだろうか。

本稿の立場では、解釈者はこの「のが」文が《サマ主格変遷構文》であるということのアブダクションにより先験的に仮定し、〈変遷イベント〉の所有者を「さがす」のだと考える。生成側から言えば文の生成者は〈変遷イベント〉の所有者を念頭に置いて《サマ主格変遷構文》として文を作成するのである。

## 5. おわりに

本稿では《サマ主格変遷構文》というこれまで見落とされてきた構文の存在を指摘し、この構文がベースとなり、一見異なる2つの構文のように見える「のが」型の主要部内在型関係節文と接続助詞的な「のが」節文とが、いずれも「のが」型の《サマ主格変遷構文》として生み出されていると述べた。

「のが」型の《サマ主格変遷構文》は「のが」節事態と主節事態の2つの事態推移を1つの〈変遷イベント〉として表す。Kuroda (1992) が主要部内在型関係節文の成立に関連性条件が必要であると述べ、2つの事態に関して「one superordinate event」の意味があると述べていることは大変興味深い。本稿の立場で言えば、「のが」型の主要部内在型関係節文は、1つの〈変遷イベント〉という上位イベントを表しているのである。

〈変遷イベント〉には〈変遷イベント〉の所有者の存在が前提とされるが、その言語的表出は任意である。〈変遷イベント〉の所有者が「のが」節内に顕在する場合にそれを「主要部」と解釈してきたに過ぎない。

「のが」型の《サマ主格変遷構文》には許容度の高いものから低いものまでである。この許容度の低さは、当該の「のが」節をサマ主格と解釈したり、当該の主節述語句を状態変化の意味に解釈したりと、推論による補完的解釈を施していることの反映である。こうした許容度の低い現象の存在は、大きな流れの中で見れば、当該の「のが」が、「のに」や「ので」のように接続助詞化する途上にあることを示すのかもしれない。しかし、もはや「のに」「ので」節を格助詞の「に」「で」の意味に解釈したり、その主節述語句を格助詞「に」「で」と結びつくものに変容解釈したりする必要がなく、文の許容度も安定していることと比べてみれば、現段階の「のが」は接続助詞化した「のに」「ので」とは異なり、主格「が」の意味を存続させている段階にあると言わなければならない。

### — 参考文献

- 天野みどり (2002) 『文の理解と意味の創造』 笠間書院
- 天野みどり (2010) 「主要部内在型関係節と接続助詞的な‘が’」『表現学部紀要 (10)』和光大学表現学部, pp.5-19
- 天野みどり (2011) 『日本語構文の意味と類推拡張』 笠間書院
- 天野みどり (2012a) 「様態・状況主格変遷構文—いわゆる接続助詞的な「のが」の文の意味解釈—」2012.10.6 公開ワークショップ「構文の意味をめぐって—日本語研究と構文理論の接点—」発表レジュメ
- 天野みどり (2012b) 「名詞節か副詞節か—「の節」の名詞性・節性の検討—」2012.12.15 国立国語研究所共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」公開シンポジウム発表レジュメ
- 天野みどり (2013) 「現代日本語の接続助詞的な「-のが」について」2013.3.24 言語対照研究系合同研究発表会 NINJAL Typology Festa (「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」形態統語班) 発表レジュメ
- 天野みどり (2014) 「接続助詞的な「のが」の節の文」『日本語複文構文の研究』ひつじ書房
- 石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』岩波書店

- 尾谷昌則 (2001) 「主要部内在型関係節の成立条件とプロミネンスによる項選択」 KLS21.
- 小原京子 (2002) 「構文理論からみた主要部内在型関係節の意味と機能」大堀寿夫編『シリーズ言語科学 3 認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』東京大学出版会, pp.227-295
- 黒田成幸 (1999) 「主部内在関係節」(改訂版)『ことばの核と周縁 日本語と英語の間』くろしお出版, pp.27-103.
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 坪本篤朗 (1994) 「副詞句(節)と副詞的付加詞—いわゆる、「主要部内在型関係節」について—」『人文論集』静岡大学人文学部社会学科言語文化学科研究報告 45:1, pp.167-175.
- 坪本篤朗 (1995) 「文連結と認知図式—いわゆる主要部内在型関係節とその解釈—」『日本語学』14:3, pp.79-91.
- 坪本篤朗 (2003) 「再び、主要部内在型関係節構文—「分離」と「統合」の間—」『ことばと文化』6, 静岡県立大学, pp.27-44.
- 坪本篤朗 (2005) 「付加詞句中の主要部内在型関係節」『ことばと文化』8, 静岡県立大学, pp.31-54.
- 坪本篤朗 (2011) 「「部分」と「全体」から複文の問題を考える—いわゆる「主要部内在型関係節」の形式と意味と語用論—」2011.9.11 国立国語研究所共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」研究発表会発表レジュメ
- 坪本篤朗 (2013) 「「の」による名詞化と主体性—いわゆる、主要部内在型関係節を中心に—」2013.3.24 言語対照研究系合同研究発表会 NINJAL Typology Festa (「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」形態統語班) 発表レジュメ
- 寺村秀夫 (1978) 「「トコロ」の意味と機能」『語文』34 大阪大学文学部国文科 (寺村 (1992) 『寺村秀夫論文集Ⅰ日本語文法篇』くろしお出版, pp.321-336)
- 野村益寛 (2001) 「参照点構文としての主要部内在型関係節構文」『認知言語学論考 No.1』ひつじ書房, pp.229-255
- 堀川智也 (2000) 「いわゆる主要部内在型関係節の名詞性と副詞性」『日本語 意味と文法の風景—国広哲弥教授古稀記念論文集—』ひつじ書房, pp.317-326
- 三原健一 (1994a) 『日本語の統語構造』松柏社
- 三原健一 (1994b) 「いわゆる主要部内在型関係節について」『日本語学』13:7, pp.80-90.
- 三原健一 (2006) 「主要部内在型関係節」三原健一・平岩健著『新日本語の統語構造』松柏社, pp.153-177.
- 三原健一 (2008) 『構造から見る日本語文法』開拓社
- レー・バン・クー (1988) 「『の』による文埋め込みの構造と表現の機能」くろしお出版
- Kuroda, S.-Y. (1974-77) "Pivot-Independent Relativization in Japanese I - III". *Papers in Japanese Linguistics* 3-5.
- Kuroda, S.-Y. (1992) *Japanese Syntax and Semantics*. Kluwer Academic.

- \* 一部の用例収集に際し国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(少納言)を利用した。
- \* 本稿は2013.10.12 公開ワークショップ「構文と意味の拡がり」における口頭発表を基にしている。当日、歴史的变化の観点から小柳智一氏、接続詞的「それが」との関係について三宅知宏氏からご質問いただいた。その他にも多くの方から有益なコメントをいただいたことに感謝申し上げます。
- \* 本稿は2013年度科学研究費(基盤研究(c))課題「日本語の自動詞構文と意味に関する研究」の成果の一部である。